

経済・金融 フラッシュ

2010年1-3月期 資金循環統計

個人金融資産は対前年44兆円増加の1453兆円

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

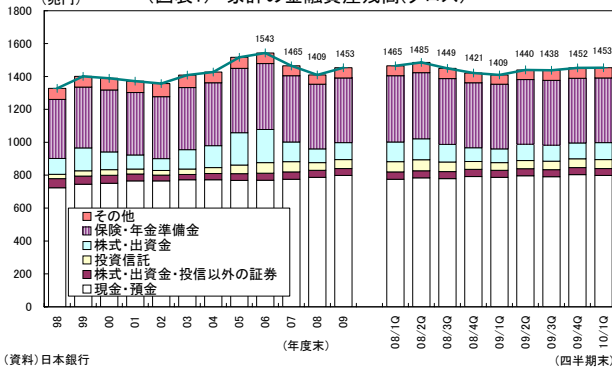
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 個人金融資産残高(2010年1-3月期末): 年度ベースでは3年ぶりの増加

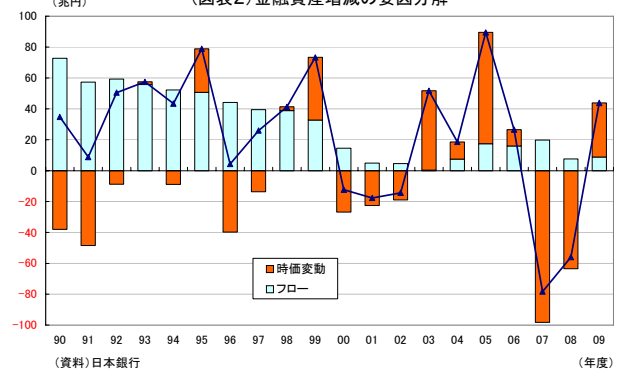
2009年度末の個人金融資産残高は1453兆円と、2008年度末から44兆円(3.1%)の増加となった。この44兆円をフロー(流出入)と時価変動に分解すると、フローの影響が9兆円(流入)、時価変動の影響が35兆円(うち株式・出資金が22兆円)と、昨年度の株価回復が大きく影響している。一方、長期的に見ると、フローの流入額は減少傾向にある(1990年代平均50兆円/年⇒2000年代平均10兆円/年)。高齢化や雇用者報酬の伸び悩みが背景にあり、結果、個人金融資産は近年頭打ち傾向となっている(図表1,2)。

四半期ベースでは、前期(2009年10-12月)末比0.3兆円増と僅かながら増加した。1-3月は一般的に賞与の支給月を含まないことから、例年フローで流出となる傾向があり、今回も8兆円の流出となったが、株価の回復に伴う株式・出資金などの時価増加9兆円がこれを賄った構図となった(図表1,3,4)。

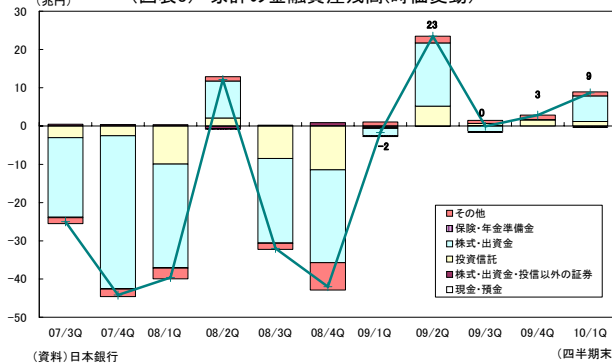
(兆円) (図表1) 家計の金融資産残高(グロス)



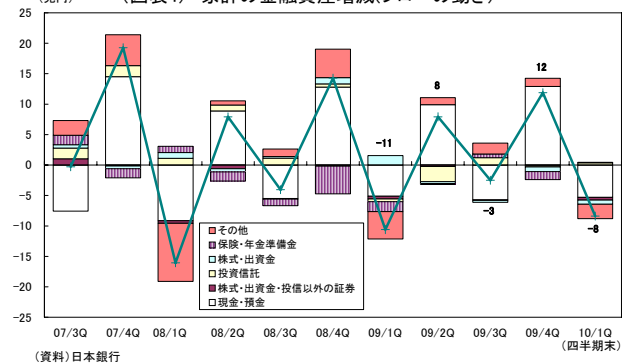
(兆円) (図表2) 金融資産増減の要因分解



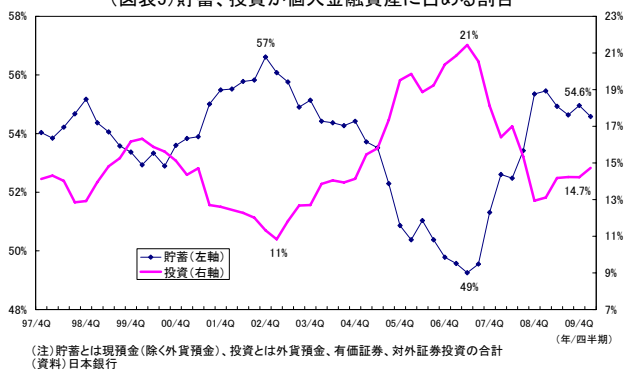
(兆円) (図表3) 家計の金融資産残高(時価変動)



(兆円) (図表4) 家計の金融資産増減(フローの動き)



(図表5) 貯蓄、投資が個人金融資産に占める割合

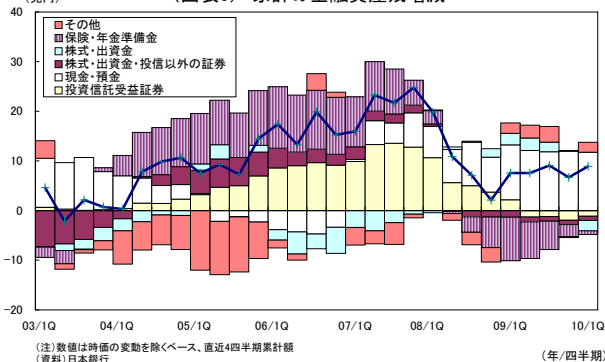


2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の基調: 引き続き安全性重視の姿勢が強い

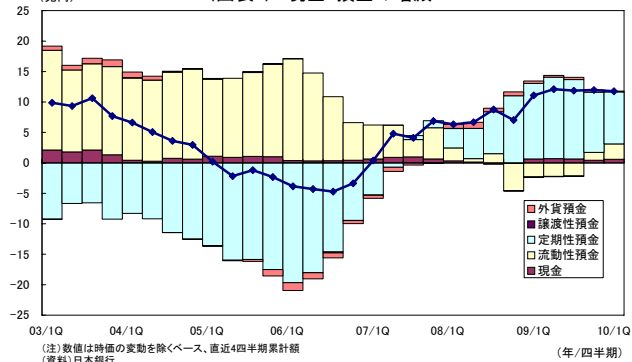
四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、07年度以降、株安・円高を背景に投資信託への資金流入が大幅に減速し、金融資産への流入の大部分を現預金、特に定期性預金が占めている状況が続いている。

足元の市場環境自体は一時期に比べ改善したものの、「貯蓄から投資へ」という流れにはなっておらず、引き続き安全性重視の姿勢が強いようだ(図表6~9)。

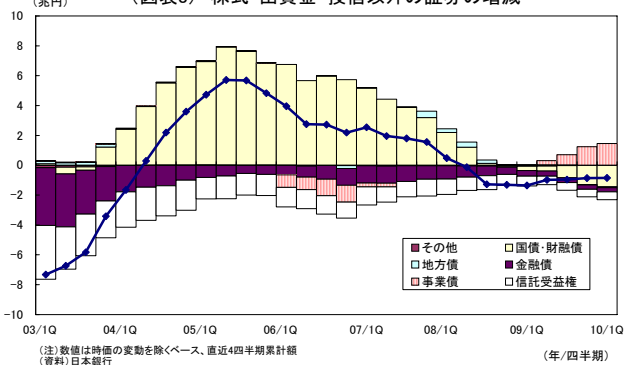
(図表6) 家計の金融資産残増減



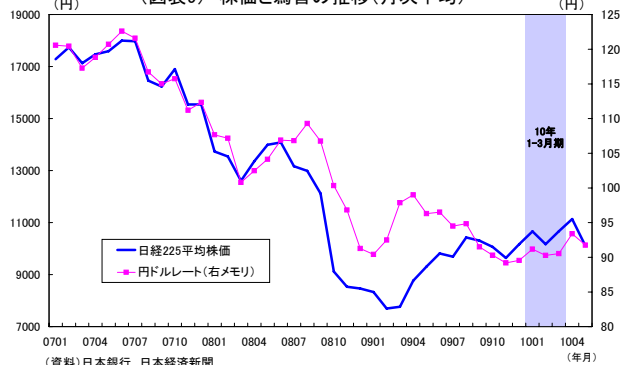
(図表7) 現金・預金の増減



(図表8) 株式・出資金・投資以外の証券の増減



(図表9) 株価と為替の推移(月次平均)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。